

### プロローグ

「あなたって変。」新婚まもないころ、妻が言った。本人は気づいていなかったのだが、寒風吹きすさぶ冬の朝、一睡もしないで帰って来て、ニコニコしているらしい。

ムシャクシャしたとき、疲れているとき、何の道具もいらない。ただ、ボーッと星を眺めることが好きである。満天の星空に囲まれ、宇宙との繋がりを感ずる、「星」と触れることは人生の喜びなのだ。

「変」と言われても、星はやめられない。そして、十分おじさんになった今でも、「パパって変なのよ。」、妻は子どもたちに話す。子どもたちも、頷いている。やっぱり変かな？

### 星との出会い

それは忘れもしない中学一年、ある雑誌との出会いであった。天文雑誌の表紙の写真、「バラ星雲」。当時としては珍しいカラーだった。見入られてしまった。「これだ。」この日から正式に、少年は天文の道を歩むことになったのである。

正式にというには伏線がある。小学生のころ名古屋に住まいしていた我が家は、休日は家族でよく科学館に行った。そこでは、体験的に触れ合いながら科学を一日楽しめた。レールの上を鋼球が物理法則に従って動いていく様を見ながら、少年は夢中でボタンを押していた。

そんな中、一番の楽しみがプラネタリウム投影（カールツァイス製！）であった。後日、私の入学した大学の先輩にもあたる山田卓先生の解説を聞いたことが、私の天文人生のスタートになった。今でこそプラネはエンターテイメントになったが、当時、満天の星空のもと、矢印をドームに映し、星を結びながら聞いた四十五分間。先生の話にわくわくし、眼を輝かせていた。（暗闇では輝かないか。）

### 望遠鏡購入大作戦

その日から望遠鏡を買ってもらうための作戦が始まった。なけなしの小遣いで本を買い、家族との話題も星の話をして、部屋にはポスター、我は天文の道を歩み始めたぞと、猛烈にアピールをした。その甲斐あって、初めての望遠鏡との出会いは比較的早く訪れた。中学校二年、カートン製77ミリであった。屈折としては大口径で贅沢な買い物だった。

ファーストライトは「土星」であった。視野に浮かんだ土色の輪のある姿は今でも忘れない。もちろん家族に見せることも忘れなかった。

高校入学まもなくして、タカハシのP型が出た。3枚玉アポクロマート、極軸望遠鏡、コンパクト設計で小さな箱に収まる。それまでとは全く発想を変えた衝撃的な逸品であった。欲しかった。何が何でも欲しかった。しかし、当時で五万を超える金が高校生に出せるわけがない。年末年始もバイトに精を出し金を貯めた。約半分貯まったころ、ニュースが入った。なんとP型が値上げするというのだ。稼ぐに追いつく貧乏暇なし。そこで一計。貯めたお金を示し、値上げ

を両親に話し、残りを返す約束で、半額を出してもらった。感謝！

で、返すはずの残りは、半年後カメラになっていた。

### 物理クラブ天文班

高校入学後、私は物理クラブに入った。ここで私に「天文」を教えてくれた先輩と出会う。望遠鏡の扱い方、観測の方法、天体写真の撮り方、現像、焼き付けまで、天文の基礎は、ほとんどここで学ばせてもらった。卒業後も同好会でお世話になった。

物理クラブの日課は、昼の太陽観測であった。晴れていれば、購買で買ったパンを喰えながら、一人がガイドし、一人がスケッチする。物理クラブのヘンなやつがまたやってるわいと、笑われながら続けた。先輩の観測結果と合わせ、見事な蝶型図ができあがったときは感動した。

月一回、学校での観測会。楽しみは時々遠征。当時、私たちの根城は三河高原牧場であった。高校生には車は無い。電車・バスを乗り継ぎ、そこから山道を四キロ、背中には P 型、前にはキャンプ用具、肩からはキャジットバッグ。若かったからできた芸当である。

しかし、その苦労は満天の星で報われる。360度、遮るもののない天然のプラネタリウム。さそりに流れ落ちる五月の天の川を眺めながら言葉がなかった。

### 天文学者になりたかった

青年は天文学者になりたかった。

「うーん、東大？京大？東北大学の大学院を出て、えー四百人も無給で席の空くのを待っているのか？他の道はと……。なにに、国家公務員上級試験を受けて、文部省に入り天文台に潜り込む……？」

とてもかなわぬ夢であった。

今でこそ、「趣味は天文です。」と言うと、「いいご趣味ですね。」と言われるが、当時は母が隣人に「お宅のお息子さん、朝帰りしているけど……。」と言われた。幼稚園の側で明け方彗星観測をしていて、危うく補導されかけたこともあった。そんな時代である。星で飯を食う道は今のようによくはなかった。

そこで方向転換。青年は天文普及の道、教師の道を歩むことにしたのである。でも天文のそばからは離れられない私は、ちゃっかり「理科」の先生で飯を食っている次第である。

### 愛知教育大学理科地学教室入学

無事？、一浪して愛知教育大学理科地学教室に入学した私は、そこで天文学の恩師と出会う。前任の教授が定年を迎え、一名の採用に全国から六百人も応募があった。その難関を潜り抜けてきた、東北大学大学院卒の才子である。その先生と同年入学した。卒論はもちろんその先生の指導を受けた。ちなみに私の卒論テーマは「アンドロメダ星雲の渦状腕構造の解析」である。(要するにアンドロメダ星雲がどんなふうに渦を巻いているのか観測結果と構造理論の摺り合わせをしたのである。)

同時に地学好きの多くの仲間と出会うことができた。マイナーなどと思っていた学問にこんなにも多くの心ある者がいるとは。ということは当然、一人一人、自分の得意技を持っていた。この個性の塊たちと出会ったときは笑うしかなかったが、勉強になったし、つきあっていて無性に楽しかった。

### 天文同好会

就職のため千葉に移った私は早々に地元の同好会に入った。新しい土地で同じ職業以外の人と付き合い、世界を広げたかった。会社員、自営業、学生、様々な人と交流し、いろいろな職業、立場、考え方に触れ、勉強になっている。

多少の紆余曲折もあったが、今では同好会の古株である。会長の外向手腕で、会員も増え、観測会はもちろん、地元の公共団体や企業とイベントを組むこともあり、活動も盛んになった。

何よりも同好の士が集まって観測をしていることが楽しいのである。情報交換をし、技術の伝え合い、時には機材の購入のアドバイスやメンテまで。顔を合わせ話をする、同好会の本質はそこにあると思う。

### 天文普及の道

同好会では、年間十回以上の観望会で皆さんと一緒に星を見ている。特に今年は世界天文年で例年より多くの声がかかり、しっかり貢献している。

健康で働け、いただくものをもらい、家族四人、幸せに暮らしている。中学の教師という職業柄、休日でも忙しいので、せめて夜だけでも……。私の社会貢献である。

「わー初めて見た！」

子どもたちから、お母さん、第二の人生を歩まれている方々（なぜかお父さんはあまりいない。この国の男性はやっぱり忙しいのか？）のこの声を聞くのが無性にうれしい。

観測会では必ずお土産を持って行ってもらおう。最近のブームは「携帯」のカメラで撮る「月」の写真である。これは評判がいい！

「帰ろうよ。」、せがむ子どもを待たせて、お母さんが夢中でシャッターを切っている。

### エピローグ

「理科」というと、薬のにおいのする実験室に白衣でこもっていたり、何やら小難しい理論を数学で計算していたりというイメージがある。確かにそういう側面もあるが、「理科」の本質は違っている

大学の恩師に教えていただいた言葉で忘れられないものがある。「どんなに優れた理論でも、自然に合わなければ、ただの空論。」野外に出て直接触れ、「自然に学べ」である。

天文学は「人畜無害」である。金にはならない。何百、何千光年先のことがわかって（私の卒論は二百六十万光年であった。）今の人類に直接の恩恵は無い。しかし、いつか人類は地球というゆりかごから離れ、宇宙に出て行く。それまでには、まだ何世代もかかるであろう。宇宙に

思いをはせることができるこの時代に私は生まれて幸せである。長生きしても一世紀。時が流れ、いつか私たち子どもたちが、この母なる星を離れるとき、それまでの橋渡し役として、星への関心・知識を繋いでいければ、私の存在意義があると思う。

まあ、そういう小難しい理由は置いといて、星を見ていると飽きない。幸せな気分になる。星はやめられない。純粋に星に触れることを楽しみたい！定年を指折り数えるおじさんは、満天の星空の下、生涯ドキドキ、天文少年でいたいのである。